

「和英辞典の収録語についての研究」要旨

田嶋明日香

国語辞典は、各時代の語彙の指標として研究に使用されることがしばしばある。同じように、和英辞典も当時の言語状況の参考資料となると考えられ、国語辞典とは性格を異にするが故に、国語辞典を補う収録語を有していると推察できる。本研究では、主として小型の国語・和英辞典の収録語を比較し、共通・差異を分析していく。

調査対象とした小型辞典はいずれも三省堂刊であり、和英辞典は《コンサイス》系統、国語辞典は《辞林》《明解》系統とし、比較的編集方針に大差がなく、当時広く流通していたものを採用した。年代については、1920～1960年代の中で戦前・戦中・戦後に分け、刊行年が近い和英辞典と国語辞典の組み合わせを選んでいる。

同じ和英辞典であっても1920年代～1960年代の間では、次第に外来語の増加が見られるといった差異が生じる。国語辞典も後年になれば外来語の増加は見られることは共通しているが、和英辞典は「アンコールを浴びせる」「アスファルトを敷く」などの外来語の用例文も増えていることが特徴である。和英辞典は句や文を多く挙げているため、語自体だけでなく、語の使い方の確認が可能であると判断できる。

また、和英辞典は親見出しの項目下の子見出しが多いために、国語辞典よりも幅広い複合語や派生語を収録しているという特徴も挙げられる。例えば、和英辞典は「遊び戯れる」のように構成要素から全体の意味を把握できる複合動詞の収録が見られるが、国語辞典は「有り触れる」のように構成要素を別々に見ると全体の意味を把握しづらい複合動詞を載せ、「遊び戯れる」という類の複合動詞はほとんど収録していない。

和英辞典を見ることで国語辞典には収録されていない、語の展開や使用の幅を見ることができると言えよう。